

## 第7回木曾三川下流域自然再生検討会 議事概要

日時：平成30年2月27日（火）14：00～16：00

場所：木曾川下流河川事務所1階会議室

### 1. 開会

### 2. 挨拶（木曾川下流河川事務所所長）

### 3. 委員紹介

### 4. 議事

#### 1) 自然再生計画について

自然再生計画の位置づけ、これから変更する計画の対象事業と対象期間の考え方について、事務局から説明があり、変更計画についての考え方が了承された。

#### 2) 規約改正

「規約改正」について説明、事務局から説明があり、第2条目的及び第3条構成の変更、委員の任期について、原案が了承された。

#### 3) 新たな自然再生計画の考え方

冒頭の「議事1) 自然再生計画について」において説明され、了承された。

#### 4) 自然再生に係る計画変更コンセプト（案）

4-1 各河川の特徴等を踏まえた重点メニューについて

4-2 持続性を考慮した自然再生のあり方について

「各河川の特徴等を踏まえた重点メニューについて」及び「持続性を考慮した自然再生のあり方について」事務局から説明があり、質疑において次の意見等が出された。

[主な意見など]

##### ○重点整備、重点検討について

・重点整備、重点検討について、重点とする目的と内容の定義を整理し、適切に自然再生計画に反映すること。

##### ○生態系ネットワーク

・支川等との連続性の再生については、生態系ネットワークの観点から、直轄管理外も視野に入れてネットワークを確立・保全ことについて検討すること。

・河川は上下流つながっているものである。木曾川上流の自然再生の内容については適宜情報提供いただきたい。

## ○目標のタイムスパンとフォローアップ

- ・河川整備計画は30年後の完了を目標に据えているが、自然再生計画は河川整備計画と同様に30年後を目標として順応的管理のために5年ごとに点検するのか。また、30年後の目標を達成するために、5年、10年単位でのいわば小目標を定めて進めていくのか、明らかにしておいてもよいのではないか。このような目標設定のタイムスパンと進め方の話を入れた方がよい。
- ・30年経って評価を行うのでは取り返しがつかない場合がある。研究者であっても環境の変化を予測するのは難しいので、5年単位等、期間を区切って見直しを行い、その都度変更が可能なものとしておくのが望ましい。

## ○自然再生事業以外の事業との関係

- ・徳山ダム、長良川河口堰といった、既存施設で進められている事業と自然再生との関係を整理し、影響等を検討して、既存の事業も自然再生計画に位置付けられるように組み立てて欲しい。

## ○これまでの環境の変化、事業のレビュー

- ・木曽川周辺の地盤沈下も抑えられている状況に加えて、長良川では、河口堰上流が常時の淡水化と平水時の湛水化が達成されて20年を経過し、落ち着いた状態になっていることを自然再生計画の基盤として意識しておくことが重要である。
- ・人も資金もなくなる中で持続性を考えたとき、自然の営力と人の利用・作用のベストミックスという難しい課題がある。この面からも新しい自然再生計画を検討するにあたっては、事業開始後これまでの10年間で木曽川の環境変化がどの方向を向き結果としてどういう状態になったかを評価して始めて重点化の話がでてくる。

## ○ワンド再生

- ・ワンドにしろ、干潟にしろ、目指している姿、目標を模索しながら、やってみないとわからないところがあるのであれば、地域を絞って実施し、モニタリングとレビューをしながら進める必要がある。
- ・背割堤やケレップ水制に親水性を担わせるかわまちづくりとワンドの自然再生とは相反する面も出てくるかもしれないが、適切に関連させていくことが課題である。
- ・樹林化した水際を多様にしていくことと同時に、持続性の観点からは一度整備したものをどのように維持していくかという検討も必要である。
- ・計画策定が第一歩だが、実践するのが大切だ。ワンド再生とか干潟再生は大がかりだが、思い切って実施しなければ先に進まないと思う。

## ○ヨシ原再生

- ・ヨシ原再生に市民として参加してきたが、その成果は十分でなく、うまくいっていないような気がしている。
- ・生えないところに植えているので、生育しない。河口堰の建設時にヨシの生育するような運用についても議論されてきたので、それとの整合を図る必要もある。淡水・湛水域でも生育している琵琶湖周辺などを参考に、ヨシが生えるところに生える環境をつくる必要がある。

## ○水産漁業との関連

- ・河川外の話になるが、河口堰の開門により、鈴鹿では臭いが気になる、イワシ、コウナゴが採れないなどと言われている。桑名の漁場は河口堰建設前に採れていたところが採れなくなり、採れなかったところが採れるようになった。堰が建設されて20年経ち、貝の品

種改良をしてきた効果もある。もし開門により環境が変わると、また一からやり直しになるが、現在、桑名の組合に悲壮感はない。中勢、南勢の組合長の方がよほど危機感を持っているので、木曾三川下流域の環境を海域まで含めるなら、この場に喜んで参加するのではないか。

- ・湾では流入河川のほかに外洋からの影響も受けているため、木曾三川の影響だけで沿岸域の現象を考えることは難しい。しかしながら、木曾三川の影響は広く及ぶことは認識しておくべきと思う。

#### ○持続性のある自然再生を行うための市民連携、実践・現場視点

- ・市民の立場からは、何を目的として何が行われているかをわかりやすくし、市民が参加しやすい取り組みを工夫することで自然再生の事業も盛り上がると思う。
- ・地域の子どもの体験学習などを実施してきた経験からは、今の子どもたちは、川は危険だからと近づかないようにといわれ続けている。危険のない川と触れ合えるような浅場などができるとうい。
- ・現場を見ていると樋管出口に落差があっても出水の時には魚が行き来して、上流域には生息している。支川との連続性については、現場に魚が遡れるものを取りあえず作り、効果をモニタリングしながら整備してはどうか。検討会での検討結果で大がかりに実施するばかりではなく、ちょっとした工夫をすぐに現場でやっていただいたほうがよい。
- ・二枚貝のたくさん生息している場所もあるので、大切に守らなければならない。
- ・モニタリングをして取りあえずの工夫の効果をみるというのは非常に有効で、関市で二枚貝が生育する排水路の改修時に、小さな自然再生を行っている事例がある。小さなことが環境には大きな効果をもたらしている。
- ・やるべきことはいくらかでも挙げられる。問題や提案を吸い上げられる仕組みがあれば、市民との連携で問題の解消も進むのではないか。

#### 5) 今後の予定について

「今後の予定について」事務局から説明がなされ、木曾川水系流域委員会で議論されている河川整備計画との整合などについての質疑の後、了承された。

次回第8回検討会は3月22日と4月9日の2回に分けて現地調査を予定している。

#### 6) 閉会

以上